

# 女性の力による二項対立の解消： 「兄と妹」におけるイタリア人表象

市川 純

## 序

メアリ・シェリー (Mary Shelley) は、その生涯において、フランス、スイス、ドイツ、オランダ、プラハ、イタリア、と、ヨーロッパ各国を旅している。中でもイタリアは、メアリがしばしば自身の創作作品の舞台に設定した地として重要である。ルネサンス期の英雄カストルッチョ・カストラカーニ (Castruccio Castracani) を描いた歴史ロマンス『ヴァルパーガ』 (*Valperga: Or, the Life and Adventures of Castruccio, Prince of Lucca* 1823) を初め、幾つもの短編小説の舞台もイタリアに定められている。

これらの作品の背景には、メアリ自身の旅行体験がある。メアリは実際にイタリア各地を転々と旅している。彼女のイタリア訪問は大きく分けて二回ある。一度目は1818年から1823年にかけて、ミラノやヴェネツィア、ローマ、ナポリ、フィレンツェ、ピサ等を訪れている。二回目は1840年から1843年にかけてであり、詳細は『ドイツ・イタリア漫遊記』 (*Rambles in Germany and Italy in 1840, 1842, and 1843* 1844) に記されている。

二回目の旅行の体験は、旅行記という形で比較的直接に作品に反映されているが、一回目の旅行は直接的な形では作品化されていない。この時期は、娘のクレアラ (Clara)、息子のウィリアム (William)、そして夫パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley) を相次いで亡くしており、絶えず悲劇的事件がメア리를襲っていた。現実的には非常に辛い時期だったのである。しかし、イタリアの土地やそこに暮らす人々はメアリの想像力を刺激し、様々な形で表現されることになる。今回取り上げる「兄と妹、あるイタリアの物語」 ('The Brother and Sister, an Italian Story' 1832) はその一つである。

数あるイタリアを舞台としたメアリ作品の中でも、この短編作品は、イタリア人の気質をモチーフにした作品であり、メアリがイタリア人をどのように捉え、表象したのかを考察する上で注目に値する。この作品は、中産階級の女性を主な読者層とし、毎年11月、或いは12月に刊行されていた贈呈本 (gift book)、或いは年鑑 (annual) の一つである『キープセイク 1833年号』 (*Keepsake for MDCCCXXXIII* 1832) が初出である。E・シャープ (Miss E. Sharpe) が描き、T・エンゲルハート (T. Engleheart) が版画に起こした“Flora”の絵と共に出版された (図版1参照)。

メアリの短編作品の多くは、贈呈本という媒体が初出であるために、個別に論じられることが少

なく、ジャンル総括的にまとめられることが多い。しかし、「兄と妹」はメアリがいかに巧みにイタリア人の気質を捉え、表現していたのかを考える上で、重要な考察材料を提供する。特に贈呈本の主な読者層は、中産階級の女性であり、対象とする読者層は長編小説よりもある程度限定されている。また、内容も詩や散文のアンソロジーであるために、作品は簡潔にまとめたものでなければならない。このような執筆上の限界が定められている中、メアリはいかに巧みにイタリア人というモチーフを活かして作品を執筆しているだろうか。本論は、まずこの作品の執筆背景を辿った後、作品内部の分析を行い、メアリによる巧みなイタリア人氣質の表象と、贈呈本の主な読者層である中産階級の女性とがどのように関係しているのかを議論する。



図 1

## 1. 執筆の背景

「兄と妹」の執筆時期は1832年頃であると考えられる。メアリの短編作品集 *Mary Shelley: Collected Tales and Stories with Original Engravings* の編者であるチャールズ・E・ロビンソン（Charles E. Robinson）によれば、最終的な原稿の調整がこの年の7月から11月の間に行われていた（*Mary Shelley* 386）。本章では、メアリがイタリアを訪れた1810年代後半から、「兄と妹」を執筆した1830年代初めにかけてのイタリアの歴史的状況について確認し、執筆の背景を探る<sup>(1)</sup>。

ウィーン体制後のイタリアは九つの諸国家に分かれ、オーストリアが強大な支配の手を伸ばしていた。1814年、トスカーナ大公にハプスブルク家のフェルディナンド3世が復帰、パルマ公国はオーストリア皇帝フランツ1世の娘マリ・ルイーゼが領有、モーデナ公国はオーストリア系エステ家のフランチェスコ4世が領有した。翌年、オーストリア支配によるロンバルド・ヴェーネト王国が成立する。1816年、オーストリアがミュラ国王を退位させて、ブルボン家のフェルディナンド王が復帰したナポリ王国は、シチリア王国と合併して両シチリア王国が誕生するが、ここには1817年までオーストリア軍が留まっていた。

また、ウィーン会議によって、ヨーロッパ各国は復古主義を打ち出す。イタリアはそれぞれの諸国家によって、どの程度ナポレオン時代に受け継いだものを維持するかが異なっていた。パルマ公国は諸制度の大部分をそのまま引き継いだ一方、サルデーニャ王国とモーデナ公国は旧体制に戻そうとする方針が顕著だった。両シチリア王国と教皇国家はこの中間的立場に立ち、ロンバルド・ヴェーネト王国は部分的にマリア・テレジア時代の制度を復活させ、トスカーナ大公国はさらに18世紀における改革の成果の復活に熱心であった（北原 355-56）。

しかし、「自由主義的要求を掲げ立憲政治を求める人々はカルボネリーア結社に活動の場をみいだした」（北原 358）。1820年7月にナポリ近郊でカルボネリーアの反乱が起こる。この反乱の余波はパレルモにも広がり、シチリアの自治を求める民衆反乱を引き起こした。翌年にはピエモンテで憲法制定を求めて青年将校と秘密結社が反乱を起こす。この知らせは当時イタリアにいたメアリののもとにも届き、彼女の日記にはピエモンテへの言及が登場する。“News of the revolution of Piedmont” “The Piedmontese troops are at Sarzana” (*Journals* 357, 358)

ピエモンテ革命は、国王軍によって鎮圧されるが、この時期のイタリアでは、各地で革命が起こっている。1831年にもボローニャで革命が起こった。このような流れの中で革命家マッツィーニ（Giuseppe Mazzini）が登場し、青年イタリアを結成するに至るのである。

このように、「兄と妹」は激動の時代にあったイタリアを執筆の背景としており、物語もイタリアの町で引き起こされる抗争を描いている。ただし、「兄と妹」の舞台は同時代ではない。はっきりとした年代は定かではないが、以下の冒頭の記述を見ると、時代を遙かにさかのぼって、中世に求めているようである。“It is well known that the hatred borne by one family against another, and the strife of parties, which often led to bloodshed in the Italian cities during the middle ages, so vividly described by Shakespeare in *Romeo and Juliet*, was not confined to the Montecchi and Capelletti of Verona, but existed with equal animosity in almost every other town of that beautiful peninsula.”（‘The Brother and sister’ 166）<sup>(2)</sup> 物語の舞台を中世の異国に求めることは、贈呈本というジャンルの特性上珍しいことではない。しかし、メアリの場合は、中世のイタリアに対して独自の思い入れを抱いていたのではないだろうか。メアリは、上記引用に挙げられているシェイクスピア（William Shakespeare）の『ロミオとジュリエット』（*Romeo and Juliet*）をもちろん読んでおり、日記にもその記録が残っている（*Journals* 256）。だが、それだけではなく、広範なイタリア文学の読書体験や、イタリア史の研究がメアリの創作の背景には存在している。

イタリア滞在中の日記には、イタリア語の勉強に打ち込んでいた様子が垣間見られるが、そこには多数の文学作品が登場し、一種の教材として機能していたことが分かる。18、19世紀イタリアの文学作品のみならず、ルネサンス時代のダンテ（Dante Alighieri）やタッソー（Torquato Tasso）、アリオスト（Ludovico Ariosto）の『狂気のオルランド』（*Orlando Furioso* 1516）、また、リチャードソン（Samuel Richardson）の『パミラ』（*Pamela; or, Virtue Rewarded* 1740）、『クラリッサ』（*Clarissa or, the History of a Young Lady* 1747-48）のイタリア語訳まで読んでいたことが日記によって明らかである。さらに、1823年の『ヴァルパーガ』出版に備え、イタリア史に関する大量の文献を読んでいた。メアリは、近代のイタリア文学作品も読んでいるが、中世やルネサンス時代の文献に並々ならぬ時間を割いている。このような読書傾向から考えて、メアリの関心は、同時代のイタリアよりも、中世やルネサンス時代のイタリアにあったのではないかと考えられる。

それに、メアリは同時代のイタリアの描きにくさを感じていたとも考えられる。このことについて、メアリは、後年のエッセイ「現代イタリアのロマンス」（‘Modern Italian Romances’ 1838）の中で、

次のように述べている。

The Italians have no novels – no tales relating to the present day, and detailing events and sentiments such as would find counterparts in the histories and minds of themselves and their friends. Many reasons may be given for this. The actual state of manners could never be detailed: the Italians would be so scandalized if the mirror were held up to themselves. . . . Another impediment lies in the impossibility of delineating the influence exercised by the priests; which in all classes is very great, and too often pernicious. ('Modern Italian Romances' 258)

現代のイタリア人の様子は、現実を活写する小説という媒体には相応しくなく、その理由は現代イタリア人の性質、及び、聖職者の社会的影響力の強さにあると述べられている。このような当時のイタリアの様子は、メアリが「兄と妹」の執筆に際し、中世のイタリアを舞台に選んだ事実に少なからず影響を与えているものと思われる。

激動の歴史を刻んでいたイタリアで過ごした経験を踏まえながらも、古典的なイタリア文学の素養や、イタリア史の研究に加え、上記のような意識のもと、メアリは現実のイタリアよりも、中世ヤルネサンス時代のイタリアの方が創作においては相応しいものと考えたようである。

では、メアリは中世イタリアの中でも、具体的にどの場所を作品の舞台に選んだのか。それはシエナである。作品の主要な舞台をシエナにしたことは興味深い。

物語の舞台が具体的に何年頃なのかははっきりしないが、ジョアンナ・M・スミス (Johanna M. Smith) は14世紀と考えている (Smith 65)。しかし、スミスは何故14世紀と断定できるのか、その理由を記していない。そこで、この時代のシエナはどのような歴史を刻んでいたのか、以下に詳しく見ていく。

シエナはカモッリーア区、チッタ区、サン・マルティーノ区の三つに分かれており、それぞれから政治的組織への代表者が選ばれた。14世紀に的を絞れば、9人執政官体制 (1287–1355)、12人執政官体制 (1355–69)、改革者執政官体制 (1369–85)、ポポラーニ執政官体制 (1385–15世紀末) と呼ばれる政治体制が敷かれていた (池上 92–94)。特に9人執政官体制、或いは「ノーヴェ」体制は、「自由と共和主義を希求する中世イタリアの都市共和国中の「傑作」」 (石鍋 30) とされるほど、繁栄を築いた時代である。

しかし、家同士の争いは絶えることなく、「兄と妹」にも登場するトロメーイ (Tolomei) 家は1315年にサリンベニ家と激しい戦いを繰り広げ、また1332年にも両家は私闘を繰り返した (石鍋 124–25)。トロメーイ家はまた、1318年に肉屋や公証人などのギルドの者たちを扇動し、体制に反旗を翻してもいる (石鍋 49)。恐らく、このようなトロメーイ家の動きを「兄と妹」は踏まえているため、作品の舞台も14世紀と考えられるのであろう。

また、「兄と妹」ではイタリアらしさを演出するために、カトリック的表象を幾つか挿入しているのだが、中でも以下の描写はシエナらしさを醸し出すものである。“At length, at the corner of a street, she recognized an image of the Madonna in a niche, with a lamp burning over it, familiar to her

recollection as being near her home.”（‘The Brother and Sister’ 172）シエナはマリア信仰が非常に強い町である。街中の壁龕にマリア像があるのはシエナの特徴であり、ある研究者が数え上げたところ、今でもなお 126 体見つかったという報告がある（池上 128）。上記引用は、マリア像が街中のあちこちに存在しているシエナの特色をよく表した描写であるといえるのだ。

では、この町に熱烈なマリア信仰が現れたのはいつであろうか。それは、初期中世であると考えられており、さらに 1260 年のモンタベルティの戦いにおいて、マリアへの祈願によってフィレンツェとの戦いに勝利したことが、この地のマリア熱を高めさせた（池上 125）。こうして、街中のあちこちにマリア像ができるほど、マリア崇拝は強まったのである。その様子を「兄と妹」の上記引用は端的に示している。

メアリは実際のシエナの様子を物語の中に巧みに織り込み、シエナの文化的特徴をよく知った上で「兄と妹」を描いている。この作品は、メアリが現地イタリアに赴いたことと、多くのイタリア語文献に触れて、イタリアの土地柄や文化、歴史を学んでいたことによって成立している。つまり、この作品は贈呈本用の小品ではあるが、実証的な見地からも描かれているのだ。また、中世のイタリアを舞台とするに当たり、とりわけ抗争の激しかったシエナが選ばれたのは、激動の時代にあった 19 世紀前半のイタリアを執筆当時の背景に抱えていたことも関係しているだろう。こうして、メアリはシエナにおけるマンチーニ（Mancini）家とトロメーイ家との対立抗争を描いた物語「兄と妹」を執筆したのである。

## 2. イタリア人氣質による二項対立

「兄と妹」には、イタリア人らしさについて、直接的に作者による言葉が述べられている箇所が幾つもある。その言葉によって示されるイタリア人らしさが、この物語における事件を引き起こしている。では、メアリが考えるイタリア人らしさとは、どのようなもので、それが何を引き起こしたのであろうか。本作において、イタリア人らしさについて最初に登場する記述は以下である。

They [The Italians] loved their native walls, the abodes of their ancestors, the familiar scenes of youth, with all the passionate fervour characteristic of that clime.

It was therefore no uncommon thing for any one among them, like Foscari of Venice, to prefer destitution and danger in their own city, to a precarious subsistence among strangers in distant lands; or, if compelled to quit the beloved precincts of their native walls, still to hover near, ready to avail themselves of the first occasion that should present itself for reversing the decree that condemned them to misery.（‘The Brother and Sister’ 166）<sup>(3)</sup>

ここで強調されているのは、イタリア人が自らの故郷に寄せる愛情の強さである。その郷土愛は、イタリアの風土に根ざした情熱的なものである。イタリア人を情熱的な人々と見ることは、古典的な捉え方であるが、その古典的な見方こそ、この物語を動かす大きな軸となっている。イタリア人だからこそ、故郷を熱烈に愛し、その反対に敵を激しく憎み、その結果この物語が生まれている。

郷土愛が強ければ強いほど、違う土地同士の間で激しい対立が繰り広げられる。ウーゴ・マンチーニ（Ugo Mancini）はトロメーイ家との戦いに敗れ、故郷のシエナを追われる。ウーゴが決定的に惨敗したのは、フィレンツェからの援軍が敵としてやってきたためである。先に見たモンタペルティの戦いを始め、シエナは商業覇権を巡って何度もフィレンツェと武力衝突を起こしており（池上 44）、中世のシエナがフィレンツェと対立関係にあった歴史的背景が踏まえられている。

トロメーイとの戦いに敗れ、怪我を負って床に臥すウーゴを看病する息子のロレンツォ（Lorenzo）はトロメーイを憎むが、そこにはまたしても作者によるイタリア人らしさを示す言葉が入る。

Lorenzo, though replete with noble qualities, was still an Italian; and fervent love for his birthplace, and violent hatred towards the foes of his house, were the darling passions of his heart. Nursed in loneliness, they acquired vigour; and the nights he spent in watching his father were varied by musing on the career he should hereafter follow—his return to his beloved Sienna, and the vengeance he would take on his enemies. ('The Brother and Sister' 168)

ここにも、熱烈なまでの郷土愛と、その裏返しである自分の家の敵に対する強い憎しみが、イタリア人に特有の気質であると、地の文は語っている。メアリは、郷土への愛とその郷土とは対立する者への強い憎しみを、イタリア人特有のものとして捉え、描いている。石鍋も「封建的気風を受けついで中世イタリアの都市市民たちは、敬虔な反面粗暴で激しやすく、すぐに武器をとって、力でものごとの解決をはかろうとした」と述べている。このような中世イタリアの人々の特徴を、メアリはよく捉えていると言えよう。幾分紋切り型のイタリア人像であるが、ここで表現されているイタリア人らしさは、後に詳述するように、大きな反転を生むための重要な布石として機能している。

故郷のシエナを追われたマンチーニ家は頼れる親戚もおらず、ウーゴの他には息子ロレンツォと娘フローラ（Flora）のみの孤独な生活を強いられる。これと対照的なのは、いまやシエナを支配するトロメーイ家のファビアン（Fabian）である。“Count Fabian, the darling of the citizens, vaunted as a model for a youthful cavalier, overflowing with good qualities, and so adorned by gallantry, subtle wit, and gay, winning manners, that he stepped by right of nature, as well as birth, on the pedestal which exalted him the idol of all around.” ('The Brother and Sister' 170-71) 明るく華やかな語彙によって描写されるファビアンは、多くの人々を周囲に集め、注目の的となっている。孤独を極め “beggars” ('The Brother and Sister' 167) となったロレンツォ達とは対照的である。

ロレンツォとファビアンは様々な特徴が対照的に描かれることにより、明確な二項対立を生んでいる。シエナを追われた者と、そこへやって来た新たな支配者。孤独な者と、たくさんの仲間を持つ者。貧乏と贅沢。そして、両者の対照性を外面的に際立たせているのが以下の記述である。“It was on a day of public feasting that Lorenzo first presented himself in rivalry with Fabian. His person was unknown to the Count, who, in all the pride of rich dress and splendid accoutrements, looked down with a smile of patronage on the poorly mounted and plainly attired youth, who presented himself to run a tilt with him.” ('The Brother and Sister' 171; emphases added)<sup>(4)</sup> 貴賤の格差が二人の身に付けているも

のによく表れている一節である。また、“looked down . . . on”という表現は、「軽蔑する」という熟語の意味のみならず、経済的にも社会的にも立場が上になっているトロメーイが、貧しく、立場も低く被支配者となってしまったロレンツォを見下すという、上下関係をも象徴的に示している。

このように、「兄と妹」におけるロレンツォとファビアンは二項対立は上下の対立であると言える。その上下とは、貧富の格差であり、社会的立場の格差である。経済的にも、社会的にも、今やファビアンはロレンツォの上に立って支配する者となっている。

このような上下関係の二項対立の中であって、フローラは上部に存在しているファビアンを憎んでいる。ロレンツォはファビアンにより5年間の追放を命じられ、その間フローラをトロメーイ家に預けるのであるが、フローラはファビアンを憎み、以下のように評している。

She hated Count Fabian as Lorenzo's destroyer, and the cause of his unhappy and hazardous exile. His accomplishments she despised as painted vanities; his person she contemned as the opposite of his prototype. His blue eyes, clear and open as day; his fair complexion and light brown hair; his slight elegant person; his voice, whose tones in song won each listener's heart to tenderness and love; his wit, his perpetual flow of spirits, and unalterable good-humour, were impertinences and frivolities to her who cherished with such dear worship the recollection of her serious, ardent, noble-hearted brother, whose soul was ever set on high thoughts, and devoted to acts of virtue and self-sacrifice; whose fortitude and affectionate courtesy seemed to her the crown and glory of manhood; how different from the trifling flippancy of the butterfly, Fabian: . . .

(‘The Brother and Sister’ 176)

財力もあり、美男子を思わせるファビアンは、外面的な華やかさが強調されている。また軽妙なウィットは華々しい社交界での活躍を思わせる。これらの特徴がロレンツォには欠けているのだが、彼の内面的な高貴さはロレンツォの華々しさよりも遥かに尊いものとしてフローラには映っている。これまで述べてきたような、富や社会的力によって築かれた上下関係における「上」に位置付けられたファビアンの特徴が、くだらなく、軽薄なものとして扱われている。その代わりに、兄のロレンツォの内面的な尊さが“high”という言葉によって表されることにより、ロレンツォとファビアンの上下関係は逆転しているのである。

イタリア人らしさの名の下に、マンチーニ家とトロメーイ家は激しい衝突をし、対立構造を生んでいる。そして、ロレンツォとファビアンは明確な二項対立を築いているのだが、この二項対立は二重の上下構造を持っていると言える。つまり、社会的、経済的にはファビアンが上に立つ一方で、内面的な高貴さにおいてはロレンツォが上に立っているのである。

### 3. 二項対立を解消する女性フローラ

以上述べたように、マンチーニ家とトロメーイ家との間には明確な二項対立が存在し、両者は対照的な特徴を見せながら、互いを憎みあい、抗争する。しかし、この対立構造を崩していく役割が女性、

特にロレンツォの妹フローラには与えられている。対立抗争が、主として男性達によって引き起こされている中、女性はその中でいかなる役割を与えられているかのをここでは確認する。

ロレンツォは、ファビアンに逆らったため、シエナを5年間追放される憂き目に遭うが、妹のフローラをトロメーイ家に預けることを決意する。マンチーニ家のフローラをトロメーイ家に預けることは、それまで存在していた明確な二項対立を崩し、敵対していた両者を融合することを意味する。ここでフローラは二者の対立を調停する象徴的な意味を帯びている。

また、フローラが周りの人間達と築き上げる関係性は、対立を解消させる新たな世代の誕生を示唆している。次の二つの引用に注目してみたい。最初はフローラを良く思わないファビアンの母の態度である。“Sometimes she [Flora] had the more mortifying task imposed on her of waiting on the Countess de' Tolomei, who having lost two brothers in the last contest with the Mancini, nourished a deep hatred towards the whole race, and never smiled on the luckless orphan.”（‘The Brother and Sister’ 175）トロメーイ伯爵夫人は自分の兄弟の命をマンチーニ家によって奪われたことを恨んでおり、ここには、明確な二項対立が維持されている。これに対して、トロメーイ家に預けられたフローラを世話するお付の者達は、新たな世代による新しい人間関係の可能性を示している。

The countess was unkind and disdainful, but it was not thus with Flora's companions. They were amiable and affectionate girls, either of the bourgeois class, or daughters of dependants of the house of Tolomei. The length of time which had elapsed since the overthrow of the Mancini, had erased from their young minds the bitter duty of hatred, and it was impossible for them to live on terms of daily intercourse with the orphan daughter of this ill-fated race, and not to become strongly attached to her. . . . They called her an angel; they looked up to her as to a saint, and in their hearts respected her more than the countess herself.（‘The Brother and Sister’ 175-76）

伯爵夫人とは違い、若い女性のお付きの者達は、フローラと非常に親しい。しかもそれは、時の経過によるものだと書かれている。ここには、フローラやファビアンの親の代に繰り広げられていた抗争の時代が終わりつつあることが示されている。また、フローラが彼女達から天使と呼ばれ、聖人として“look up”されていることも注目に値する。先に見たように、ロレンツォはファビアンから“look down”される上下関係が成立していた。ところがフローラに関しては、逆にトロメーイ家の人達から尊敬されるようになり、上下関係で言えば上に位置しているのである。このように、フローラにはこれまでの二項対立を揺るがす役割を与えられている。

フローラによる二項対立の解消に向けての方向性は、さらに彼女による敵味方を超えた博愛主義的な看病という行為によって強まる。彼女は落馬したファビアンを看病し、両者の関係は密接に繋がる。“Nothing except her presence controlled his impatience; before her he was so lamb-like, that she could scarcely have credited the accounts that others gave her of his violence, but that, whenever she returned, after leaving him for any time, she heard his voice far off in anger, and found him with flushed cheeks and flashing eyes, all which demonstrations subsided into meek acquiescence when she drew



near.”（‘The Brother and Sister’ 180）フローラはファビアン機の嫌をコントロールし、両者は、母親と赤子のような関係によって結ばれている。フローラがファビアンの世話をしたのは“duty”（‘The Brother and Sister’ 180）によるものと当初意識していたが、両者は次第に惹かれ合う。ここには上に引用した怪我人、或いは病人の看病という行為が非常に重要な意味を持っている。「兄と妹」において、看病という行為は、非常に篤い絆で結ばれている者同志で行われるものなのだ。

「兄と妹」では、看病の場面が3回登場する。最初に登場するのは、ロレンツォが父親を看病する場面である。しかも、そこではフローラとファビアンの関係にも似た表現が登場している。“Ugo often said, I die because I am an exile:—at length these words were fulfilled, and the unhappy man sank beneath the ills of fortune. Lorenzo saw his beloved father expire—his father, whom he loved as a mother loves a sickly infant which she has led from its birth to an early five years’ old tomb.”（‘The Brother and Sister’ 168）ここでは、ロレンツォによる父親の愛し方が、病気にかかった幼な児に対する母親のようなものであると例えられている。非常に強い絆によって結ばれている二者の関係は、「兄と妹」においては母親とその子供との関係という表現によって示されているのだ。これは、ファビアンを「あやす」フローラの様子とも共通する。フローラによるファビアンの看病は、既に両者が強い関係性によって結ばれていることを示すものであり、それまでに築かれていた二項対立を崩すものである。

マンチーニ家とトロメイ家の間に成立していた二項対立は、物語の最後で5年の追放期間を経たロレンツォがフローラと再会することによって完全に解消することになるが、そこで繰り返されるのもまた看病の場面である。フローラがたどりついた宿屋では、熱病にかかって瀕死の状態にある兄のロレンツォをファビアンが看病している。しかも、看病を受けているロレンツォは、フローラに対し、ファビアンのことを以下のように語る。“These are indeed wonders,” he at last said, “and if you are mine own Flora, you perhaps can tell me who this noble gentleman is, who day and night has watched beside me, as a mother may by her only child, giving no time to repose, but exhausting himself for me.”（‘The Brother and Sister’ 189）ここにもまた母と子の譬えが登場する。怪我や病気に苦しむ者を癒し、強い愛情を示すものとして母親という存在が強調されている。そして、その母親のような人物による親身な看病が、二項対立を解消させる役割を担っているのだ。

二項対立の融和に当たっては、女性的な力が重要な力を担っている。フローラの活躍はもちろんのこと、ロレンツォとファビアンによる看病の様子は、母子関係という女性的側面を強調した形で表現されており、女性が対立関係を解消させる強い力を持つことが示されている。これは何を意味するであろうか。

「兄と妹」の中で女性の存在が重要な意味を持つ一番大きな理由は、この作品が女性を主たる読者層とした贈呈本のために書かれたところに求められるであろう。本作品に限らず、*Keepsake* に収録されている作品には、女性読者を意識しているであろうと思われる特徴が随所に見られる。その特徴とは、主人公が往々にして女性であり、恋愛や結婚にまつわる物語や、感傷的な詩が多いという点で

ある。「兄と妹」の結末も、フローラがファビアンへ恋情を抱き、両者が結ばれることを予感させるものである。

また、贈呈本には、恋愛や結婚の物語を通して当時の中産階級的な道徳を説く、教訓物語的側面もある。『キープセイク 1833 年号』の中から端的な例を挙げると、チャールズ・ゴア夫人 (Mrs. Charles Gore) による「嘆き悲しむ人達」(‘The Mourners’) は、親の言うことを聞かずに結婚した娘が、散々な目に遭って後悔をするという話である。「兄と妹」の場合は、物語全体を通して、敵味方を超えた博愛主義的な態度を女性に推奨する側面が含まれており、これもまた当時の道徳観の一端を垣間見せている。

マンチーニ家とトロメーイ家の間にあった対立関係は、女性の存在によって解消されるのだが、それと共に、冒頭に述べたイタリア人らしさに関しても、興味深い表現が見られる。違う出自のイタリア人同士の抗争は、まさにイタリア人であるところに起因すると語られていたが、物語の結末に至って、イタリアという表現が、人間の心の寛大さを示すための巧みなレトリックへと変化する。

“How, dearest brother,” said Flora, “can I truly answer your question? to mention the name of our benefactor were to speak of a mask and a disguise, not a true thing. He is my protector and guardian, who has watched over and preserved me, while you wandered far; his is the most generous heart in Italy, offering past enmity and family pride as sacrifices at the altar of nobleness and truth. He is the restorer of your fortunes in your native town—” (‘The Brother and Sister’ 189)

イタリア人だからこそ、かつては故郷に強い愛情を見せ、対立する家には強烈な敵意を見せていた。しかし、そのような素質を持つイタリア人の中で最も寛大であることは、対立する両家を和解させる力を持つことを意味する。イタリア人らしさの中のある部分を突き進めて行くと、イタリア人らしさが生んでいた対立関係を解消させてしまう力が生まれるのである。イタリア人だからこそ憎みあっていた二者は、ここにきて、イタリア人だからこそ深く寛大な心を見せ、強く結び付きあうようになる。これは、贈呈本という極めて限られた頁数の中で行われた見事なレトリックであり、短編作品の執筆に長けたメアリの腕前を示すものである。

## 結 論

メアリ・シェリーは激動のイタリアを実地で経験したものの、その関心は中世ヤルネサンス時代のイタリアに向けられており、「兄と妹」では作品の舞台を中世のシエナに求めた。しかし、中世のシエナは家同士の私闘が繰り返されており、19世紀当時のイタリアに劣らず激動の時代であった。このような時代を背景とした「兄と妹」には、メアリ自身が感じたイタリア人の気質が端的に表れている。その気質とは、故郷への情熱的な思いと、その裏返しである対立する家への強い憎しみを持つということである。だが、メアリは対立するマンチーニ家とトロメーイ家の争いを、対立したままでは終わらせなかった。イタリア人だからこそ激しく憎しみ合っていた関係を、女性の力によって解消さ

せ、さらにイタリア人特有の寛大さでもって、両者を和解へと導くようにしている。これは贈呈本における短編作品という限られた頁数内における、メアリの巧みな筆力を示すものだ。

イタリア人の捉え方として、同胞に強い愛情を抱き、その反面敵対者へ強い憎しみを抱くという見方は、紋切り型であり、『ヴァルパーガ』のような作品と比べると、人物造形は浅い。しかし、メアリはこの古典的なイタリア人氣質の捉え方をうまく利用しており、二項対立における対立する理由を、同胞にしてしまう理由にすり替えている。「兄と妹」はイタリア人氣質を巧みに取り込み、利用した作品である。イタリア人らしさが対立の根源であったのだが、それがやがて対立の解消の理由として機能するようになる。メアリはイタリア人らしさというものを、巧みなレトリックとして簡潔な短編作品の中に組み込み、発展させている。そして、対立要素を解消させるに至る力として、贈呈本の主な読者層であった女性を意識し、女性による対立の解消を狙ったものと考えられる。

註(1) この時代のイタリア史について、筆者は以下の著作にその情報を負っている。北原敦編『新版 世界各国史 15 イタリア史』山川出版社、2008。

(2) 「兄と妹」の引用は、普及していると思われる Mary Shelley, *Mary Shelley: Collected Tales and Stories with Original Engravings*, ed., Charles E. Robinson (Baltimore, MD: Johns Hopkins UP, 1976) に基づくが、誤植と思われる箇所は *Keepsake for MDCCCXXXIII*, ed., Frederic Mansel Reynolds (London: Longman, 1832) を参照して訂正した。

(3) ロビンソン編のテキストでは“familiar”が“famliar”となっているが、誤植と思われるので *Keepsake* と照らし合わせた上、訂正した。

(4) ロビンソン編のテキストでは“run”の前に“a”が入っているが、誤植と思われるので *Keepsake* と照らし合わせた上、省いた。

#### Works Cited

Reynolds, Frederic Mansel, ed. *Keepsake for MDCCCXXXIII*. London: Longman, 1832.

Shelley, Mary. *The Journals of Mary Shelley 1814-1844*. Ed. Paula R. Feldman and Diana Scott-Kilvert. Baltimore, MD: Johns Hopkins UP, 1995.

—. *Mary Shelley: Collected Tales and Stories with Original Engravings*. Ed. Charles E. Robinson. Baltimore, MD: Johns Hopkins UP, 1976.

—. ‘Modern Italian Romances.’ *Mary Shelley’s Literary Lives and Other Writings*. Vol. 4. Ed. A. A. Markley. London: Pickering and Chatto, 2002. 227-60.

Smith, Johanna M. *Mary Shelley*. New York: Twayne, 1996.

池上俊一『シエナ——夢見るゴシック都市』中公新書、中央公論新社、2001。

石鍋真澄『聖母の都市シエナ：中世イタリアの都市国家と美術』吉川弘文館、1988。

北原敦編『新版 世界各国史 15 イタリア史』山川出版社、2008。